

---

# がちゆり 結あか編

ベガF91

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

がちゆり 結あか編

### 【Nコード】

N1644Z

### 【作者名】

ベガF91

### 【あらすじ】

少し複雑な気持ちになっていた結衣。しかし、あかりと一緒にお出かけすることになって

ゆるゆりの短編です。

(前書き)

結衣×あかりの短編です。

その前に一言、結京、結ちな、ちなあかの好きな方々へ申し訳ありません!!m)。)。m

甘々な感じの恋愛になっていますが、どうぞ

とある冬の日。結衣はいつものように倶楽部の部室へといった。ちなみに京子は先生に呼ばれ少し遅れてくるとのこと。倶楽部に入るとそこにはあかり1人がいた。

「あ、結衣ちゃん」

「あかり、ちなつちゃんは来ていないの？」

「ちなつちゃんは今日は用事があるから来れないって」

「そっか」

今までにない組み合わせである。あかりとは長い付き合いだけでも2人きりになったのはこれが初めてだった。

いつもは京子と3人一緒に遊んでいたからあかりと2人きりに一緒にいたのではない。そんなことを思った結衣はいつものように座布団の上に座り、くつろいであかりと会話を始めた。

「しかし、あかりと2人きりなの初めてな気がするな……」

「昔、いつもは京子ちゃんと3人で一緒に遊んでたからね。今はちなつちゃんも入れて4人だね」

「そうだな」

いつも一緒と聞いて、結衣は少し憂鬱になる。京子とはいつも自分の家に泊まりに来ては2人でいろいろやったり、ちなつは以前、

お出かけしたこともある。

でも、あかりとはそういう機会は一度もなかった。そう考えた結衣はあかりにあることを話した。

「あかりさ、今度の土曜日空いてないかな？」

「土曜日？ 空いてるけどどうして？」

「今度の土曜日一緒にお出かけしない？」

「お出かけ？ いいよ」

あかりは快く受け入れてくれた。結衣は待ち合わせ場所と時間を言った。すると、ここで京子がやってきた。

「来たよーってちなつちゃんは？」

「今日は用事があるから来れないって」

「ぶう、せっかく今日はミラクルん変身セット持ってきたのにー」

「まったく京子は……」

今日は3人だけであって、いつものようにだらだら過ごす。しかし、結衣は少し落ち着けない様子であった。結衣の心に何かが引っ掛かっていた。

(なんだろ……。このもやもやした気分……)

あかりとの約束の日、駅前にてあかりが待っていた。そして結衣がちょうどやってきた。

「あ、結衣ちゃん」

「ごめん、待った？」

「うん、あかりもちょうど来たところ」

「じゃあ、行こうか」

「うん」

結衣とあかりは一緒に歩き、さっそくどこ行こうか結衣は尋ねた。

「あかりはどこ行きたい？」

「あかり、映画観たい」

「わかった」

2人で映画を見ることとなった。そして映画館に着き、どんな映画が観たいかあかりに聞いてみる。

「あかりはどれが観たい？」

「あかりこれ観たい」

あかりの観たい映画はほのぼの系の映画だった。さっそく、映画を見ることに。しかし、内容は本当に平和ものであまり刺激的なものではなかったため、結衣は眠そうだった。

しかし、隣で観ているあかりはとても楽しそうに見ていた。

（この映画でよく眠くならないな……。あかりは……）

そしてついに映画も終わり、外にでるとあかりはとてもうれしそうな顔つきであった。

「面白かった？」

「うん。とっても面白かったよ」

（あの映画本当に面白かったかな……？）

そんなことを思うことももう一つ、心に引っかかることがあった。

（あの時、なんであかりを誘ったんだろ……。まだあかりとは一緒に時間がないから？ でも……）

そんな気持ちながら、次の場所へと向かう。すると、ちょうどクレープ屋さんがあった。

「あかり、クレープ食べたい？」

「うん」

結衣とあかりはクレープ屋でクレープを二つ注文し、結衣はバナナクレープ、あかりはいちごクレープを注文した。

ちょうど近くにいたベンチに座り、おいしそうに頬張った。

「おいしいね、結衣ちゃん」

「そうだね。あかり、ほつぷにクリームがついてるぞ」

「え？ どこどこ？」

結衣は指であかりのほつぷについているクリームをすくい、そのまま舐めた。

「えへへ、結衣ちゃんありがとう」

「どういたしまして、それにいちごクレープもおいしいな。私のも食べる？」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

結衣はクレープをあかりの口に持っていき、あかりは口を開いてクレープを一口食べる。

「あーん……はむっ。……バナナクレープもおいしいよ」

「そっか、よかった」

その後も2人はクレープを食べ終わると次の場所へと向かった。次はゲーセンであった。



「あかり、ゲーセン初めてだよ」

「私はいつも京子と言ってるからな。行こうか」

ゲーセンに入り、そこにはたくさんの人たちがいるんなゲームをしている姿があった。さつそくなんのゲームをしようか選んでみる。すると、行列に並んでいる人盛りがあった。その大人気のゲームは機動戦士ガンダムエクストリームバーサスであった。

家庭用が出てその人気は衰えることはなく、今でも大人気であった。

「あれ前に結衣ちゃんがやっていたゲームだよね？」

「家庭用が出ても人気だな。それより、クレーンゲームする？」

「うん」

エクストリームバーサスは置いておき、クレーンゲームをするこ  
ととなる。さつそく、クレーンゲームをすることに。

ここで結衣はあかりにどんなぬいぐるみを取ってほしいのか聞いて  
みた。

「あかりはどのぬいぐるみが欲しいんだ？」

「あの熊さんのぬいぐるみが欲しい」

「わかった」

あかりが欲しがっている熊のぬいぐるみを狙い、クレーンですく

いあげる。そして、運よく熊のぬいぐるみが取れた。

「はい」

「わー。ありがとう結衣ちゃん」

あかりはともうれしそうに熊のぬいぐるみを抱きかかえる。その後もいろんなゲームをやり、気が付けばもう外は暗くなっていた。

「遊びすぎたな……」

「もう帰ろっか」

「そうだな」

今日一日、あかりと一緒に過ごした日はとても面白かった。しかし、結衣はどうしてあかりを誘ったのか、いまだに理由がつかめていないのであった。

あかりと一緒に過ごしたことは特になんの変化もなく、いつもとは変わらない日常であった。

（あつという間に一日が終わっちゃったな……。でも、いまだにわからない。なんであかりと一緒にこうして遊ぶように言ったのか……）

そんなことを思っていると、日はもう暗く、もうそろそろ結衣の家に着くころだが、あかり1人暗い夜の中を帰らせるわけにはいかない。結衣は……

「あかり、今日家泊まってく？ もう暗いし、あかり1人は心配だ

しゅ」

「え、でも……」

「明日日曜日だしさ。ちよつどいいじゃないか？」

「う、うん。じゃあ、お言葉に甘えて……」

そんなわけであかりも結衣の家に泊まることとなった。さっそく結衣の家にあがっていった。

「さ、あがって」

「お邪魔しまーす」

家の中に入り、さっそくあかりは携帯で家の人に結衣の家に泊まっつていくと連絡した。そして結衣はさっそく夕食の準備をすることに。

それに気づいたあかりは手伝いをしてくれて夕食がスムーズにできた。夕食はオムレツとハンバーグであった。

さっそく、あかりが一口食べる。

「結衣ちゃんのオムレツおいしいよー」

「ありがとう」

「えへへ、結衣ちゃんのオムレツ久しぶりに食べたよ」

「確か、私が1人暮らしと言って、京子が強引に訪問してきて以来か」

そんな昔のことを思い出し、夕食後、2人はお風呂に入り、パジャマに着替える。あかりは以前、倶楽部の合宿のときに着ていた犬のパジャマで結衣も同じくパングのパジャマであった。

「これって合宿の時のだね。結衣ちゃんの家にあっただ」

「京子が私にあげたものだから、ちょうどあっただ」

その後、結衣はゲームをすることにし、あかりは隣で観ていた。そのゲームはナモクエだった。

いつものようにレベルアップの繰り返し。このプレイングを見たあかりは言ってきた。

「そっいえば、いつもボスを倒すためにレベルアップしまくってるって京子ちゃんから聞いたよ」

「こうして楽にボスを倒すのが快感なんだ」

「ゆ、結衣ちゃん……、今日あかり悪いことしたかな……？」

「い、いや！ 全然！ 誘ったのは私だし」

そんな脅えるあかりを見て結衣は説得し、ゲームを続けた。そして、ボスもレベルアップしまくったおかげで楽に倒したのだった。ゲームを終えると一緒に寝ることに。あかりの表情を見るとてもわくわくしたような雰囲気であった。

「あかり、結衣ちゃんと初めてお泊りしたよ」

「まさか、あかりが泊り来るなんて思ってもなかったよ。でも、今日は少し遊びすぎたか」

今日のことと話をする中、まだ結衣の心はもやもやとした気持ちでいっぱいだった。

(なんたる、このもやもやとした気持ち……。まだ気持ちが落ち着かない……)

「結衣ちゃん、うかない顔してどうしたの？」

「あ、ああ……。なんでもない」

「結衣ちゃん」

「なに？」

「今日はいろいろありがとつ。あかり、結衣ちゃんと一緒に遊べたとっても楽しかったよ」

「あ……」

あかりの満面の笑顔を見た瞬間、ようやく結衣はこのもやもやとした気持ちに今気が付いた。

(そうだ……。私……)

そして、結衣はあかりにこんなことを告げる。

「あかり」



合ってほしいんだ……」

「結衣ちゃん……」

戸惑っていたあかりは結衣の言葉を聞き、我に返るとその結衣の真剣な想いが通じたようであかりも答える。

「その……あかり……うれしいよ。結衣ちゃんがあかりのことを想ってくれて」

「あかり……」

「こんなあかりでよかったら、喜んで！」

「あかり……ありがとう」

ギョッ

うれしさのあまりあかりをそつと優しく抱く結衣。その後も2人は結衣があかりを抱いたままで寝てしまったのだった。

そして、次の月曜日。いつものように結衣と京子が登校している中、あかりがやってきた。

「京子ちゃん、結衣ちゃん、おはよー」

「おはよー、あかり」

「おはよー」

挨拶をすると、あかりは結衣の隣に立ち、一緒にいろんなことを話し始めた。

「昨日のドラマ観た？」

「ああ。確か、高校一年の男子が小学生の女子たちにバスケットを教えるやつだったね」

「そうそう」

そんな楽しそうな会話をしている二人を見た京子は驚きでいっぱいだった。

「な、なんだ……このイチヤイチャぶりは……」

「おはようございま……って……!」

ちょうど、ちなつも来て結衣とあかりが楽しそうに会話しているところを見て衝撃を受けたのだった。



「きよ、きよ、きよ、京子先輩……、なんですか！ あのイチヤイ  
チヤぶりは!？」

「わ、私にもわかんないよ……。あの2人何かあったのかな……?」

「そうとしか……ほら！ 手つないでるし！ ムキー!! なんで  
結衣先輩とあかりちゃんがあんなに仲良くなつてー!!！」

「まあまあ、それより今日はミラクルんのコスプレ持ってきたから  
ちなつちゃんに着せてあげるよー」

そういつて京子はちなつに抱き着いて来たのだった。

「ちよ、京子先輩いい!!！」

そんなドタバタな中、結衣とあかりはいまだにイチヤイチヤして  
いた。すると、結衣は目をつむってこんなことを想った。

(こんな幸せな毎日が続きますように)

「結衣ちゃん、どうかしたの?」

「なんでもない」

まだ恋は始まったばかり。ここから一歩ずつ前進していくのであ  
った。

(後書き)

いかがだったでしょうか？

とりあえず、結衣とあかりをくつつけさせてみました。

後日またゆるゆりの短編を書こうと考えています。

基本はエロはなしで行こうと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1644z/>

---

がちゆり 結あか編

2011年12月5日23時53分発行